

門凡4  
號 3788  
卷 1

萬延庚申補刻



# 賤嶽戰場圖會



尾陽 文華堂梓

大正 5.12.16  
主人 赤

安永天明の頃より此の國會を  
ものぞき撰ひ出さる今ハ汗半亮棟下母

至れり中にいより忠利ぬの結が嶽に國會を梓  
乃寧世圖を卷首に出して諸國國會の精粹を  
考す方のわざたよハ豊た同生涯に熟功を  
人の志りへつゝぬぬに比まらんや討つ賤嶽乃  
一戦の後世をり人々を語りて母の傳ふことい

賤嶽圖會

卷一

要しき地圖無りしを此の年其戦場の地理を  
 訂し其弘治の御代に公の美名と諸君を  
 可代とすむかしくおぼしめし

尾張の團人

小田切杏江識



賤ヶ嶽物惣圖辨

賤ヶ嶽ハ豊太閤いままおけ本流前も秀吉あり  
 一おけ本田直作勝家と併し争ひしとき本  
 陣とすら不ありたりこそ而もつめり中央より  
 影向湖有て南ハ勢がつけ大石山ホく是お柴  
 中川の凍少しそ田と山の凍不向井が凍を  
 い海にその時のこまは佐久る凍せし  
 江市山本田が凍せし一葉ヶ瀬ホ湖をわ葉  
 田圃里が流し一は石跡亦向きの石不る為志  
 或ハ七雄七鏡の三庭戸溪ホ圖繪入りあり

且んとつとも切の方角明あしどきとく大戦場  
 とありひやうく使かしみのなま惣圖といふ  
 わり終とも一巻に写さば細鑑に一一く  
 且ちちごう一りて一の初画は左に二の  
 初画を右よありしめこの初画とけしきに  
 して左の下に右の初画と右の下にけり  
 則惣圖とあり五の巻に初下といふ下教里教  
 委初づし是漢に王普文が蜀の接道圖會  
 此巻と著たりし巻を圖乃何よありしものこそ  
 牛朝よたぬくいはしどきあを圖のちとめありんえ

東鑑のやめと述るあしげきだりぬる形テの後  
 とつ由たがらば画よ寫さしむるものありあまは  
 する人戦ありしむとありひやりしる様は  
 其のつらば呼れんかしとばせりしはさむりしを  
 せんあどありひしと耳ト名長に推近州ありん  
 冷むた摺記八卷目とありしはつとつべし  
 うの書ハのあれあよは乃とらうし及び去金の  
 じくく火合とらふるは用とあらはれおはせり  
 ずぶし山所左戦場合是もい細く数に

南



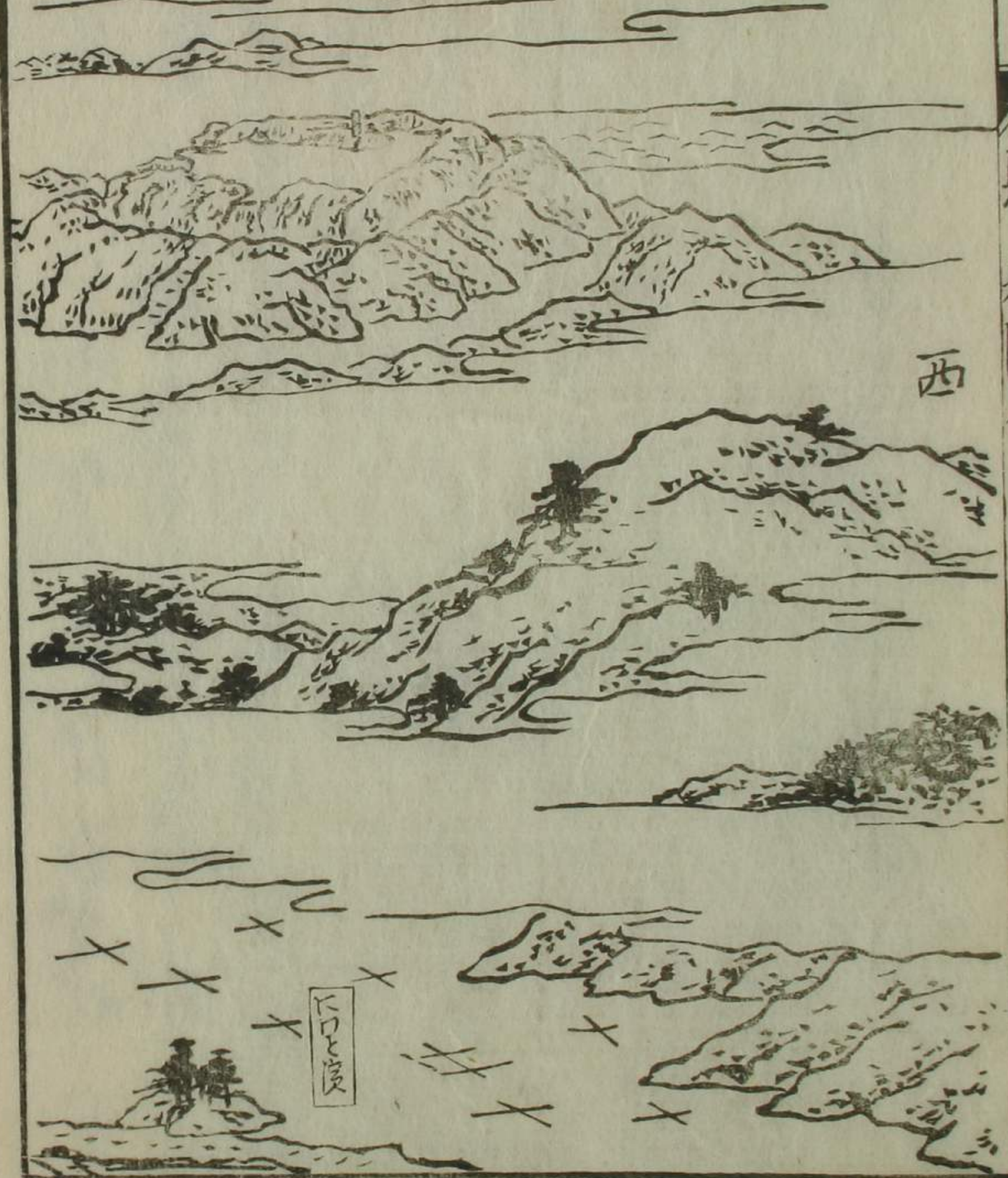
東大田

水

口

山

五旗



西

東大田

水

口

北湖 賤ヶ嶽圖會卷之七

目錄

影回湖

湖中鮎

菅山寺

奥之院

桐島家譜

子守歌

絹掛柳

龍王社

雨乞踊

北湖 賤ヶ嶽圖會卷之七

影向湖

余湖のうもと去人云あり江州海井のり  
 物乃嶽乃林廓る中ハ溪にて捨六丁長サハ一里  
 入て東雪之傍より水も始と探るにて地ひく  
 け地くもやあるとや去人余湖と唱ハ訛に  
 影向湖成地く去人余ハあゆ水湖をうへは  
 湖中れ止半浦のわにして地形をく余ハ  
 湖中を流る地ハなんぞありぬ屋まにつら

影向と訛信あやまりとこと稱し劉文宗近湖の人集りてく  
 事りてハぬめり柳影向湖と云つる來由と云ふ事  
 るにちぬめりハ澄海あやうみと云はれし是湖中を流き出る水  
 流立者りによりて名とすりてこそありて國の号を  
 と澄海の國と云ふ一と改らる後ハ近江の  
 必とぬめりハ其後澄海とぬめりて先影向湖と稱し  
 その子ぬめりハ右丞相すかひのちう原道真はらみちまこと公左近さだの後  
 大宰府だいさいに遷うつせりてはもと後醍醐天皇ごたいご御下り  
 影向かげむかひ野又のまたといふは元一と曰 皇神みかみは影向  
 鳳闕ほうくわくと護まもりんとハ柳やなぎひ侍しせり。

勅勅ちくちくの方かたなまは降來りも忍しのむ故ゆゑり一而ひと一  
 ありりハ 帝都ていとと遙とほし奉護ほうごせんとあり  
 汝な可べ能く降くだ津つ地ぢと撰せんわさハ流りゅう流りゅう瘴しょう瘴しょうとあり  
 ありまゝわがす免めんら坂さかは邑むら上のうへ帰かへりてを  
 ホよ護まもるバハ奇あま異いの思おもひをハ一ひと字じ邑むら柘せきと云  
 ふと軍いくさ神かみ岳たけの營えいとあり流りゅう多たなる故ゆゑハ中ちゆうに  
 重おもくの流りゅうる程ほどにありたよりりてんは是こゝ東あづま本もとの  
 其その像さうぬめりハ感かん後ご袖そでとひく一ひと社しゃ中ちゆうに安やすま  
 信しん向かうる信しんにそ後ご大宰府だいさい、勅ちく使しありて  
 勅ちく切き左さ近きんと免めんせりハ賜たま位い將しょう官くわん流りゅう流りゅう定さだ分ぶん神かみと

影向御と稱すは少神の宮造ありて天満大威徳自  
在天神と稱すは少神の神影向御なり  
影向御と稱すは少神の正史は八いまゝありて  
と云々

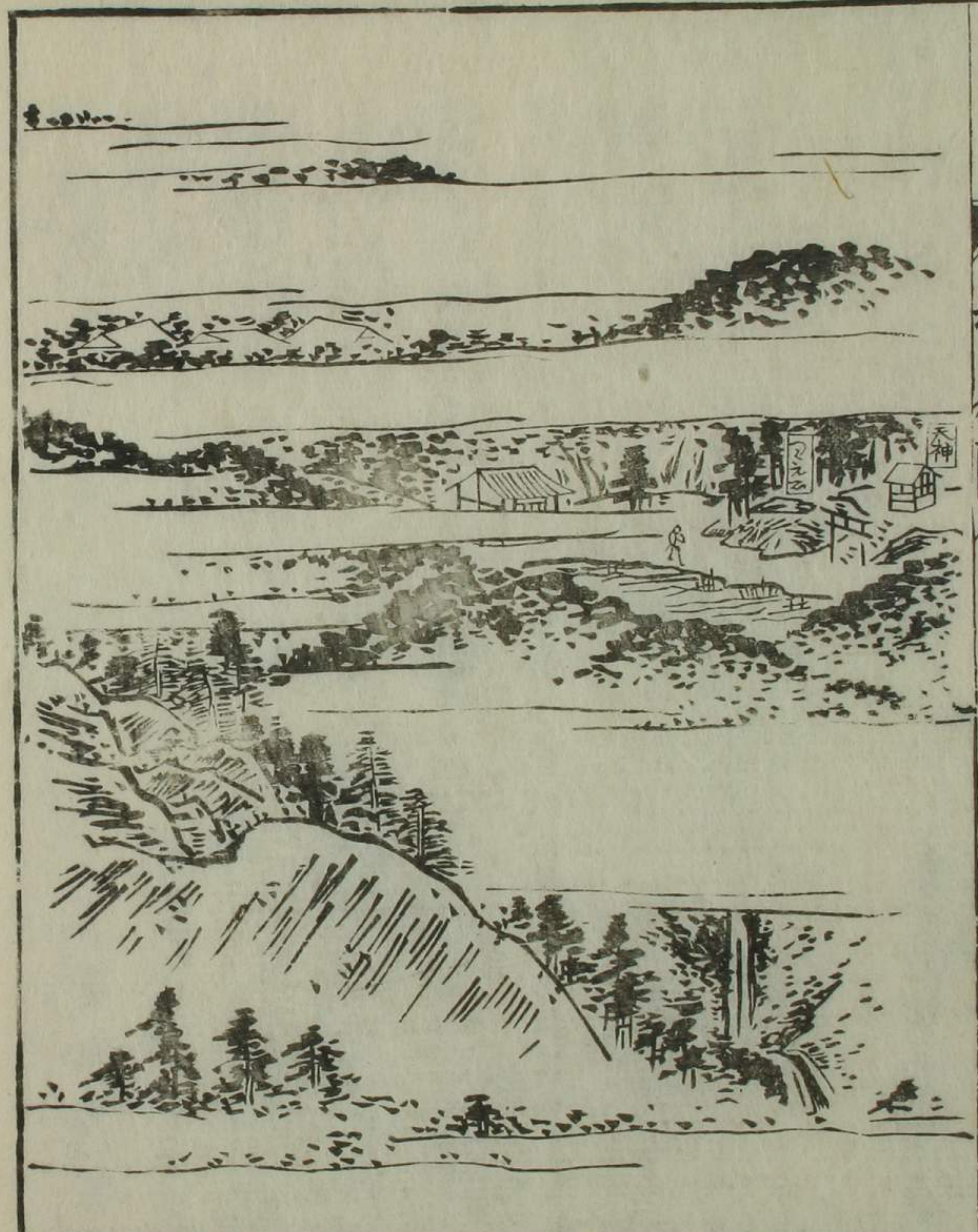
去人ふは相相知り湖を柳りよ耕はあ  
樹大木にても田畑と務む日くげはす事す  
ありきは實のうまは橋ありらむ事す  
かの木とまらんとすきも地り十尋の大樹  
と云ば力あふむはそく日とわらふ  
あり日湖と天女浴するとのんまの柳

に相教とる密よまをた集ふ天女帰天  
石敷にうれとやどよ話ひ帰るつ  
妹春れかたひとあ一子をうむ  
これ相初たましよむは後たれ一人たり  
この天女と見らむはあみ常へ一子が代  
よは父よ百信は天女は後相教の在所と  
知る天よりえらるや天女影向の湖ゆきの  
若王とのみ村老もわりまは伝へ

湖中 射

射のから、射のこく、年とあつて難はるづくは





見為圖會

七

玉たまていくく味あじハいけく強たかきし巖い之の乃のこを住すし  
 氷ことと破やぶてと射ととと捕とらと其その其その羨うらやむむハハ王わう祥しやう雲うんも  
 松ま江えのの鷄けいもも及およぶぶここかかるるつつししここのの射と服ふく彦ひこととああて  
 撰せんじじああんんしし  
 大おほ樹じゆささ君きみのの柳やなぎ堂どうささままああららまま

法隆寺

宗そう旨しゆ真ま言ごんににししてて御ご来らい市し池ちぬぬけけるる本ほん堂どうハハ十じゆ  
 面めん敷しき世せをを  
 春はる日ひ作さく  
 本ほん堂どう方かた丈ぢやう庫こ裡り御ご禮らいををああつ  
 てて返かへりり色いろののととららのの中なかつよよるるああららががここのの書かき留とどめめり  
 んんわわらら流ながれれ住かれれ影かげ白しろ湖うみ一ひと面めんりりアアん  
 阿あ比ひ羅ら右みぎととりりネネハハホホムムムムムムええわわららりり左ひだりハハ殿とのが

嶽たけをを外ほか及およぶぶりりらら所ところのの氣きををいいりりんんささかかくく夏なつ  
 日ひううふふ年とし眠ねせせばば可かなりりんん色いろ遠とほがが弟あにのの十じゆ八はち樓ろう  
 よよててああののああららりり目めよよるるああのの流ながししととああららり  
 ももいいししをを思おもひひ竹たけ水みづ觀かん有ありり資し聚く本ほん堂どうがが筆ふでののて  
 吸すすむむととくくけけをを實じつととははをを吸すすむむととくくすす色いろ

奥之院

菅か原はらののちちよよるる本ほん二に十じゆ余よふふととよよ天あま満み之ののの仕し檀たん  
 百ひゃくらられれハハ影かげ白しろああららくく後あと奉ほう信しん症しやうししぬぬくく  
 尊そん像ざうハハ降くだ来らい此こゝ津つ本ほん像ざう  
 堅かくく封ふうじじくく津つせせししひひのの事こと一ひとああららしし



身み精せい圖ず卷まき

卷まき一いち九く

御前像を新造しし常のどろく作を不  
七子に綿帳を納む神験ありしにけりて異  
病とゆひ大難と除せしむ開扉と名その  
一頁二百と書ふ守りまもせ別所は社檀ハ高  
よむりし事對皇神一是北地信所のいせん  
うらまを運獲しのみ故とれ

相如家譜

坂口邑の内小國海道の内にあり先祖生壽子  
々々の神託とありありありんまは神皇と色は  
一宮奉て足ふ家御ありありの子相如家ハ靈爰之依

て薬と地はよ急験りをもれば遠近を告るる  
ふのどろく儂と神託とありありんまは神皇  
儀と授けしありて家門繁栄に家にありあり  
やんそまよる侍を一代まで薬とつとらば  
聖と福の極りよほひてその家も榮枯文く  
はとハいともよもあはれ

古人の相如太夫天人のせしむりかこの薬も  
天人の御とまれもむつりて奉説述も難法  
子守歌

古人が説か起るるはとせし相如太夫知あて時

泣喚にちち歌とてうらまはげしは止む又あり  
あゆひは天は聲あつて赤も歌と傳ふも曰

天女よのこいばすてねえハ兼葉の下にけり  
さうーおのこの際とんぐれ争ててこのぼら  
とちちの依違風傳の里乃向あよいのちち  
あまの抱のわりの下とうさひねさ歌あが  
傳え久しき子も歌なりりり

衣掛柳

天女乃能伝はしうらまはげしは止む又あり  
あゆひは天は聲あつて赤も歌と傳ふも曰

号あるとつみねあつて園り十尋よあふ  
さう歌十丈枝葉もびうり田圃と産ふ豊  
まうまひして切掛し雨津垂あつて怪  
ぬまをよ切事と依むぬま切をケぬぬ  
る去人天女説といふん連衣掛柳といふ  
一—天女乃能伝はしうらまはげしは止む  
あゆひは天は聲あつて赤も歌と傳ふも曰  
赤梅のこいと早梅かさぬ呼吸農まおきて  
ハ梅樹うらまはげしは止む又あり  
とぬづし影向近立にハ隣たうらまはげしは止む



財  
持  
圖  
會

卷  
一  
上

經對禮新齋（イ）亦うたの形は海りてつら  
 是と裁（イ）て赤然（イ）も然とかり又かかぬありて  
 練ゆの（イ）もく又踊（イ）はれ真（イ）もありて毎年（イ）首  
 十五日八月朔日近あり（イ）思（イ）工（イ）はる雨乞お乃  
 立（イ）成（イ）就（イ）七日（イ）亦（イ）ありて（イ）立（イ）て就（イ）神（イ）は  
 厨（イ）と南（イ）浅井備（イ）前（イ）小石（イ）此（イ）日記（イ）ありと（イ）傳  
 ずあり（イ）が（イ）の（イ）八里人（イ）み事（イ）なく（イ）唯（イ）中（イ）踊（イ）の真（イ）の  
 ちもふ（イ）唯（イ）はた（イ）傳（イ）え（イ）ま（イ）子（イ）奇（イ）ありあり

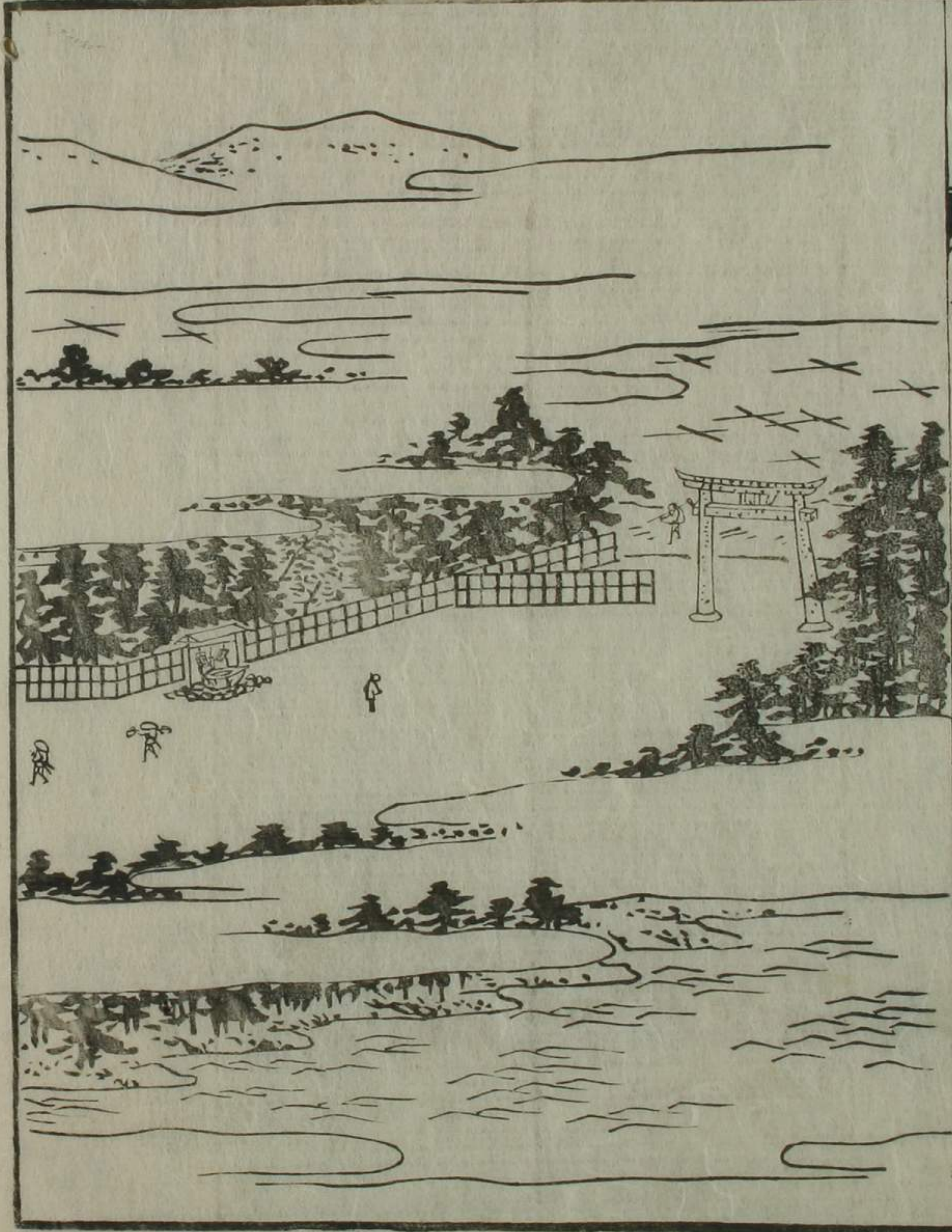
龍王社

龍王の社ハ橋柘松枝の大本（イ）倉（イ）に（イ）く（イ）こ（イ）ひ（イ）二（イ）方（イ）ハ（イ）道（イ）三（イ）方

湖中にして社（イ）は南（イ）白（イ）花（イ）表（イ）あり額（イ）ハ大（イ）龍  
 王小野道風（イ）の筆（イ）と云（イ）社（イ）前（イ）石（イ）あり大（イ）サ（イ）三尺（イ）四方  
 此（イ）石（イ）マ（イ）して（イ）ゆ（イ）あり（イ）ん（イ）ま（イ）り（イ）ハ（イ）自（イ）白（イ）者（イ）生  
 以（イ）神（イ）ツ（イ）吹（イ）の（イ）時（イ）乘（イ）此（イ）去（イ）人（イ）か（イ）ま（イ）あ（イ）れ（イ）ゆ（イ）あり（イ）と  
 ぬ（イ）と（イ）ま（イ）は（イ）石（イ）よ（イ）白（イ）雲（イ）と（イ）ま（イ）と（イ）ぶ（イ）う（イ）ち（イ）ひ  
 やり（イ）ー（イ）ぐ（イ）ら（イ）さ（イ）し（イ）て（イ）雨（イ）降（イ）ぬ（イ）矣（イ）雲（イ）石（イ）あり（イ）も  
 亦（イ）雨（イ）乞（イ）石（イ）社（イ）の（イ）う（イ）ー（イ）流（イ）り（イ）あり（イ）い（イ）の（イ）る（イ）り  
 納（イ）收（イ）め（イ）ま（イ）は（イ）石（イ）う（イ）び（イ）幸（イ）ハ（イ）湖（イ）中（イ）に（イ）ま（イ）る

雨乞踊

此（イ）在（イ）此（イ）風（イ）信（イ）と（イ）ハ（イ）こ（イ）と（イ）かり（イ）り（イ）て（イ）聖（イ）人（イ）ゆ（イ）乞（イ）踊（イ）す（イ）ま（イ）る



野々宮園繪

卷八 廿



北湖の風と雪の衣わくかどくくく心あそび  
 入るさりたるけはふよるを真まきまきしとふあそび  
 婦女は色白く衣腋受くし傍まらば婦女は艶めも  
 粗似れども其さぬ部殿聲純は比車にて婦人  
 似へくも色大坂の繁ふ成おも婦女部とくねまは京  
 師とる同目せ傳ありと伝はるの山里は伝はるる  
 ぬに思わざりと思ふハ艶ぬけぬ艶と云ふはけ  
 里のわら業の海ゆりゆりて艶と云ふはけ  
 伝はるの真風流あり

北湖 賤ヶ嶽圖會卷之七

